これからの作業学習の意義と有効性をめぐって

～ 生徒主体の作業学習の追求 ～

企画・司会者　太田俊己（関東学院大学）
話題提供者　高倉誠一（明治学院大学）
太田俊己（関東学院大学）
田所明房（植草学園大学）
指定討論者　中坪晃一（植 草 学 園 ）

KEY WORDS: 作業学習　特別支援学校　領域・教科を合わせた指導

次期学習指導要領においても、知的障がい特別支援学校の高等部段階における卒後の自立に向けた教育活動、なかでも作業学習に重点が置かれることに変更はなかろう。しかし、実際の取り組みでは、知的障がいに伴う困難性への支援を図り、生徒の自立に向けた作業学習であるのか強く疑問を抱く実践、また形ばかりの就労直結の作業を教師主導で行い、生徒諸君の主体性を軽視するかの実践等が見られるのではないか。本シンポジウムでは、作業学習実践の問題点や実状を問い、青年期を送る生徒たちが主体的にとり組む作業学習の意義とその有益性を確認していきたい。

【話題提供】今行われている作業学習を問う

作業学習は、働く活動のやりがい・手応えの実感をなによりも大切にしてきたはずである。しかし、今日、狭い意味でのキャリア教育の理解、分析的な指導観点と評価への注目、比較的障害が軽度の生徒への対応などもあって、就労直結の取り組みが多く見られる。単なる能力・態度向上の傾斜は、必要のない場面で報告・連絡・相談を求めたり、販売する機会が十分に用意されていない中で、熱心に作業に取り組むことを生徒に要求する。青年期にある生徒に対して、活動時間も活動量も十分に確保されず、一方、教師主導の「導入」と「まとめ」で多くの時間を費やす。これら、教師による「つけたい力」の先行と展開は、意図せずに生徒による主体的な取り組みを阻害するような事態になっていないであろうか。作業学習は、現行の解説にあるように「働く意欲を培う」ことを基盤に、「将来の職業生活や社会自立に必要な事柄を総合的に学習する」するものである。「生徒不在」ともいえる状況を省みて、「仕事って楽しい」「みんなで成し遂げるって気持ちいい」といった望ましい実感が得られる豊かさの視点から、作業学習を問い直さねばならないのではないだろうか。　（高倉誠一）

【話題提供】高等部作業学習の現状　時間数の比較

各校のＨＰに示される週当たりの高等部作業学習時間を調べた。首都圏の２県で、高等部単独校（分教室を含む）を除く高等部、日課表に「作業学習」とあるものを対象とした。国立大学附属校と私立校は除いた。その結果Ａ県では１５校（学部）が該当し、週当たりの平均の時間（分）は約４１２分であった。Ｂ県では１４校（学部）が該当し約２５７分であった。２県の特別支援学校高等部作業学習の比重には、かなりの開きがあるといえる。同じ２県の週当たりの作業学習設置の日数を比較すると、Ａ県では、週３日の学校が１校あるが残り１４校は週４日から５日であり、いわゆる「帯状」に作業学習を実践していた。一方、Ｂ県では、週５日を作業学習に当てる学校が１校あるが（４日が２校）、あとは、週に１日か２日であり、作業の日数は週に１日か２日程度と、「繰り返し」の薄い週日課であった。作業学習の教育課程上の位置づけは、自治体でも違いが顕著な実状で無視できない差違と思える。生徒主体の作業学習には、「繰り返しのある活動」「見通しのもてる日課」は欠かせない。看過できない現状ではないか。　（太田俊己）

【話題提供】生徒主体の作業学習を追求する

ある特別支援学校高等部「木工班」の作業の様子。室内に入ると、リズミカルな電動工具の音が。室内には大量の完成品が整然と並べられている。製品の完成度も高く本物の製品と言える。掲示物を見てみると、間近に迫った製品販売会のポスターとチラシが貼られている。販売会に向けての製作目標数や製作・販売に関する日程表の掲示も。これはすごいと思われる売り上げ目標金額も掲げられている。当然ながら生徒達の活動量も豊富に用意されている。

生徒達の働く姿を伺う。それぞれが各自の持ち場で自信を持ち良い顔つきで、意欲的に取り組む姿が印象に残る。教師の姿を伺うと、誰が生徒か先生か分からない。生徒と共に働きながら、汗を流しつつ、さりげない支援に徹している姿が印象的。作業環境はどうか。道具や電動工具等の補助具の工夫、コード類の配線、粉塵対策も万全である。絵カード・手順表を含めて、授業中の教師の言葉かけなど、どの生徒にも「できる状況づくり」を目指していることが伺える。生徒主体の作業学習を追求する実践例から、作業学習で求めたい観点を具体的に述べたい。　（田所明房）

【指定討論】作業学習の在り方について

作業学習では、「『よりよく働く』ことを積み重ねる」ことを大切にする。特に高等部では、教育課程の中心に作業学習を設定し、青年期の学校生活の充実を図るとともに、卒業後の働く生活につなげるようにする。「よりよく働く」とは、どの生徒も力をめいっぱい発揮して働くことであり、次の４点を大切にする。①生徒主体の作業学習の展開。作業学習の単元化などを基本に。②現実度の高い作業学習の展開。「お仕事・お店ごっこ」でなく、「本格的で本物の働く活動」を。③できる状況づくりの徹底。どの生徒にもめいっぱい働ける支援的対応を。④教師も生徒と共に作業を。生徒にさりげない細やかな配慮をしつつ全力で。この４点を同時に満たす方向で具体化し、どの生徒も自分から自分で、本格的で本物の作業活動に取り組み、達成感や満足感を味わいながら、青年らしく手応え感・やりがい感のある生活を送れるようにする。それを積み重ねて、「働くことの当たり前化」を図り、卒業後の働く生活にスムーズに移行できるようにする。単なる作業態度や働き方スキルの習得に焦点化するようなことではなく、「よりよく働き、やり遂げること自体」を目的として。　（中坪晃一）

(OTA Toshiki, TAKAKURA Seiichi, TADOKORO Akifusa, NAKATSUBO Kouichi)